

わたしのおとうと

仙光寺サタデースクール 一年 よしなが とまか

わたしには、4さいとしたのおとうとがいます。わたしが、ようちえんせいのかきにうまれました。おかあさんのおなかのなかにいるときから、どんなかおのあかちゃんがうまれてくるのかな・・・と、とてもドキドキしていました。でも、おかあさんが、びょういんに、にゅういんしたときには、おわかれするのがかなしくておおきなこえでなきました。それでおじいちゃんたちをこまらせてしまいました。そのひのよるにおとうとがうまれました。

ずっと、おとうとがほしいな・・・おもっていたのでほんとうにおとうとがうまれてきたときは、やったあ。とおもいました。そして、はじめておとうとにあったときには、かおをなめたり、ほっぺをやさしくなでたりしてみました。なめたときにはあまいかおりがしました。とてもかわいかったです。

おかあさんとおとうとがびょういんから、かえってきてからはずっといっしょにくらしています。おとうとが、うまれてよかったとおもうけれど、だいすきなおかあさんをとられるときは、くやしくて、おとうとがにくたしくなります。それでたいたり、けったりしてしまうことがあります。そういうとき、おとうとはいらない、とおもうことがあります。でも、わたしがしかられているときに、おとうとが、かばってくれることがあります。とてもやさしいおとうとです。そのときは、おとうとがだいすきになります。やっぱりおとうとがいてよかったです。

これからも、たくさんけんかをするとおもうけど、たったひとりのおとうとと、なかよくしていこうとおもいます。わたしも、おとうとにもっとやさしくなろうとおもいます。



「わたしのいえはのうか」

あん楽寺子ども会 二年 日高 実理

わたしのいえはのうかです。スーパーや、ちよくばいしょなどでやさいとたまごをうっています。

にわとりは、ひらがいというかいかたをしています。あまったビニールハウスのパイプでこやをたてて、中でじゆうに、あそべるようになっていきます。おすもいっしょにかっています。おすがいるのはゆうせいらんというせんにちかいたまごをうませるためです。大きなつめがおすにあつて、おすとおすがけんかをするときにそれでたたかっているのを見たので、わたしはおすがこわいです。

きれいなやさいはスーパーでうります。ちょっときずがはいったものは、ちよくばいしょでうります。それでもだめなものは、うちで食べます。人が食べられないものはにわとりにやります。そうしてむだなことをしないようにしています。

のうかでよかったことが、六つあります。一つ目は、とりたてのしんせんなやさいが食べられることです。トマトのまるかじりがわたしは大すきです。二つ目は、おとうさんがいつもいえにいてくれることです。学校からかえったら、おかえりといつてくれて、おしごとがいそがしくないときにはあそんでくれます。三つ目は、いろいろなお手つだいができることです。やさいをとったりたねまきをしたり、みんなとちがうお手つだいがたくさんできます。四つ目は、いろいろな生きものが見られることです。おとうさんがいろいろ教えてくれます。五つ目は、友だちに、にわとりがじまんできることです。本とうに見にきてくれた友だちもいます。六つ目は、やさいの名前がわかることです。学校でこのやさいの名前はなんだろうと先生にきかれたときにすぐに答えられました。よくしてたね、と言われてうれしかったです。

はんたいにのうかでいやだったことが、四つあります。一つ目は、おとうさんがいつもいえにいておこられることです。わるいことをしたときにすぐ見つかってしまいます。二つ目は、みんなでかぞくりょこうに行ったことがないことです。にわとりをかっているからいつもおとうさんがいえにのこっています。三つ目は、天気がわるいとやさいがそだたないことです。おとうさんとおかあさんがこまるのでかわいそうです。四つ目は、いやなお手つだいがあることです。トマトのはを食べるがのよう虫が大きくてブニュブニュしていきもちわるいです。

のうかは大へんだと思います。でも、おとうさんやおかあさんみたいになりたいです。わたしものうかになりたいです。



「ぼくの妹」

法輪寺 3年 今西 智滉

妹は目がわるい。
めがねをかけている。
いつもわるい事をしてぼくにおこられる。
妹はなくけれどぼくがすきと言う。
ぼくも妹がすき。
とてもかわいい。
家から出るときぼくのくつをならべて
「はい。よかったね。」と言う。
妹はやさいがきらい。
すききらいがなくなってほしい。
外で遊ぶ時は走り回ってボールを投げる。
とてもにこにこしている。
たまに「本読んで。」と言う。
だからぼくはぜったい読まないといけない。
妹はにゆうじホームと言う所から
ぼくの家に来た。
はじめはけんかばかりしていた。
夜になるとさびしくてずっとないていた。
本当はぼくもお母さんを取られて
さびしかった。
だから「妹が来なければよかったのに！」と
お母さんに言った事がある。
お母さんはかなしそうな顔をしていた。
ぼくも言わなければよかったと思った。
ぼくの妹のいい所をいっぱい見つけて
かわいいと思うようになった。
妹は正ざが上手になった。
ぼくと一緒に仏様におまいりをする。
いろいろあるけれど
ぼくはやっぱ妹がすき。



「チュンタ、ありがとう」

實才寺 四年 河村 香凜

平成二十年十二月三十一日の朝、鳥かごをのぞくと、すずめのチュンタがいない。どうしたんだろう。よく鳥かごを見てみると、下に落ちて動かない。チュンタは死んでいた。

三年前の五月、となりのおばちゃんが、

「つばめの巣の下に落ちていたよ。」

と一羽のひなを持って来た。おばちゃんは、

「生まれてすぐに落ちたんだろうね。つばめの巣に返しても育つやか。」

と心ばいそうに言った。おばちゃんの手の平をのぞくと、はだ色で、毛もはえていない。親指ぐらいのひながパタパタ動いている。

「きつとつばめの赤ちゃんだろうね。明日まで生きとくやかあ。」

とお母さんが心ばいそうに言った。

「とりあえず冷えると死ぬから、ばあちゃんのむねの所であたためておこうね。」

と、Tシャツの下から、ばあちゃんがひなを入れた。お父さんは、

「何か食べきるなら死なないけど・・・。」

と言いながらにわをほり始めた。そして、ミミズをつかまえて指で口に入る大きさにちぎってひなの口に入れた。食べた。毛もはえていないはだ色の首をせいいっぱい伸ばし、のみこんだ。もつともつとというように口を顔より大きく開けて。

夜は、小さな竹のかごに、わたとティッシュを入れていっしょにねた。お母さんが、

「五月の夜はさむいから。」

と言って、わたしが赤ちゃんの時に使っていた電気アンカの上にかごをのせた。

次の日、目をさますと、ひなは生きていた。ティッシュの上にふんをしていた。また、お父さんがミミズをちぎって食べさせた。

お兄ちゃんと名前を考えた。『チュンタ』にきめた。チュンタはよく食べよくふんをした。ティッシュをかえるのがわたしの仕事になった。十日ぐらいたって、しっぽの羽が生えはじめた。ん、おかしいぞ。羽の色は茶色。どっかで見たことがある。一日たつごとにそのすがたは、すすめになっていった。

「つばめと思っていたら、すすめだったね。」

家族で大わらした。

七月になると、りっぱなすすめになった。ただ、左足がおれているようで、上手に止まり木をつかめない。家族と話し合っ、自然にはかえさず家でかうことにした。

あれから三年、わたしが、学校へ行く時、

「いってきます。」

と言うと、チュンチュン鳴きながら、羽をばたつかせ、

「ただいま。」

と帰って来ると、また、チュンチュンと鳴きながら羽をばたつかせてよるこんでくれたチュンタ。もう家族の一員だ。チュンタが死んだ時、声がかかるまで泣いた。チュンタ、いのちの大切さを教えてくれてありがとう。



「ひいばあちゃんのかいご」

敬愛小学校 5年 島津 健生

僕のひいおばあちゃんは、今年で八十歳になります。七年前までは、僕のおばあちゃんと二人で食堂を経営していました。ひいばあちゃんの作ってくれる料理は、どれもおいしくて、僕は大好きでした。ひいばあちゃんは、市場に買い物に行くと、いつも僕のおやつと言って、くだものを買って来てくれました。僕は、そんな優しいひいばあちゃんの事が大好きでした。

七年前の一月、ひいばあちゃんは、目の手術をする事になりました。僕は不安でたまらなかったけど、ひいばあちゃんにその気持ちが伝わらない様にしないといけないと思い手術の前の日に病院に行った時はひいばあちゃんとあまり話をしませんでした。帰る前に、ひいばあちゃんが突然、「手術うけたくない」と言いました。僕は僕の不安が伝わったのかと思い、ドキッとしたのをよく覚えています。ひいばあちゃんは、おばあちゃんから、「今さらそんな事言っても無理よ。」と言われあきらめた様子でうなずいていました。この会話がみんなが聞いた、ひいばあちゃんの最後の声でした。

ひいばあちゃんは手術中に脳の病気になり体が動かなくなりました。おばあちゃんは、ひいばあちゃんのかいごのため食堂をやめ、毎月病院に通うことになりました。

声も出ない、食事だって食べられない、動く所といえば目と首と指先がほんの少しだけ

こんな状態のひいばあちゃんを見る事が僕はいやで、最初はなかなか病院にいけませんでした。それなのに、毎日通うおばあちゃんはすごいなと思いました。

かいごを続けて数年になると、さすがにおばあちゃんもつらそうで僕はおばあちゃんの体が心配になってきました。僕は、おばあちゃんに、「おおばあばはこのまま生きても良くならないんだし、本人も死んだ方が楽なんじゃないの？そうすれば、おばあちゃんだって楽になるのに」と言いました。今なら、言うてはいけない事だとわかるのですが、その時はわかりませんでした。そんな僕におばあちゃんは、「何も良くなってないと思うでしょ。でもね、毎日見ると、少しづつだけ良くなってるのがわかるのよ。名前呼んでみて。」と言いました。僕は、言われた通りにひいばあちゃんの名前を呼びました。すると、少しだけどうなづいて返事をしてくれました。それを見ておばあちゃんが「こんな小さな事だけど、そばにいないと気付けないから、大変な事も多いけど、幸せもあるからがんばれるのよ。」と教えてくれました。

僕は、ひいばあちゃんの姿を見て、いらぬ命なんてない事を知りました。かいごは本当に大変です。僕はおばあちゃんと一緒に小さな幸せをさがしながら、大好きなひいばあちゃんのかいごをしたいと思っています。



「最後のおんぶ」

国府台女子学院小学部 六年 鈴木 葵子

夏の始まり。いつもこの季節になると、何があるわけでもなく心が沸き立つ。今年のこの季節、私にとって、それは格別だった。秋の運動会で、六年生になって初めてリレーの選手になり、さらに鼓笛隊の指揮者にも選ばれていたからだ。毎日の練習で気合が入り、いつにも増して学校に行くのが楽しみだった。

「いってきます。」

その日も、はりきって家を飛び出した。

そのとたん、何をどうしたのかくるぶしがグキリッ、一瞬の強烈な痛みの電流で、全身から冷汗が吹き出しそうな感じがした。

「痛ああい。」

「どうしたの。」

玄関でその気配を感じた母が飛び出して来た。私の痛がる顔から、けがの度合いを察した母の顔を見て、なんだか痛みがもつとはっきりしてきた。不安がものすごい早さで心の中に流れこんでくるようだった。

病院で、ねんざと診断されたが、二週間はできるだけ動かさないようにしないと長引くから、気を付けてと言われた。運動会までには完璧に戻さなければとあせる気持ちでいっぱいだった。それから二、三日は、教室まで送り迎えをしてもらう事になった。階段の一步一步はどこに力を入れたらいいかわからないほど痛い。すると母は、

「おんぶしよう。」

と言って、私をおぶると、階段をかけ上り始めた。少々危なっかしい足どりに、私も全身に力が入った。下学年や先生方の視線を感じる。ましてや母より背の高い私がおんぶされているのが恥ずかしくて、早く教室に着いてほしいと思った。少しでも負担をかけまいという気持ちと、恥ずかしいと思う気持ちで、体がこう直してしまう。母も私も、お互い必死だった。だけど、母の腕は、太もものに食いこむほどしっかりと私を支えてくれていた。私は身をかくしながらも、心は母にしがみついていた。私をおんぶから降ろした母は、やれやれというほっとした顔で、

「じゃあね。」

とひよこひよこ帰っていった。その後ろ姿に

「ごめんなさい。ありがとう。」

と思った。

この出来事のあと、今の私の身長と体重を考えると、今後母が私をおぶって階段を登ることは無理だろうなと思った。あれが最後の本気のおんぶだったのかもしれない。私にとって、母はどんな時にも頼りになる存在。これからだってまだまだ助けてもらわなくてはならないけど、助けてもらいながらも、一つ一つ母にしがみつく手をはなしていかなければいけないのかもしれないと思った。

運動会では足もすっきり元に戻り、私は全力で走ることができた。



「私らしさと勇気」

相愛中学校 1年 糸岡 蘭

「人生は

前向いて生きてるもん

楽しんで生きるもん

喜んで生きるもん」

この言葉は、私が五年生の時、習字教室で色紙に筆で書いたものです。当時、これを選んだ理由は、「なんかいいなあ」と思ったからでした。それから、二年がたって、今でも部屋に飾ってあるこの色紙をながめながら、毎日を過ごしています。それを見ていると、「何事にも、一生懸命がんばろう」という気持ちになります。また、毎日、幸せに元気に過ごせていることに感謝の心でいっぱいになります。そして、「人生は一度しかないんだ」という思いが強くなり心に響いてきます。

自分の描いた夢に向かって一歩ずつ、前を向いて歩いている自分が今、ここにいます。

「私らしさ」を忘れない自分自身がいます。「私らしさ」って何だろう。私は、落ち着いて、自分をながめながら、自問自答してみました。そして、気がつきました。

どんな時でも、ベストを尽くして自分の持てるだけの力を発揮してがんばるところかなと思います。このプラス思考の考え方が、一歩、もう一歩と私を前へ歩かせてくれています。私らしく、笑顔を忘れず、努力すること。自分自身に負けない生き方を大切にしたいです。

人は、十人十色、個性にあったそれぞれの人生の歴史があると思います。それは、大切に積み上げてきた宝物だと思います。自分で決めて、進んで行く道は、不安もいっぱいですが、希望もいっぱいだと思います。

私は、六年生の夏ごろに相愛中学校に受験することを決めました。決めた理由は、体験授業に参加させていただいた時に何か引き寄せられるものを感じていいなと思ったからです。そして、塾に行き、勉強して、合格した時はうれしかったです。でも、友達ができるかななど、不安はたくさんありました。入学式、全く知らない人達ですます、不安になりました。でも、始業式の日、列に並んでいると、前の子が話かけてくれて、すごくうれしかったです。その子のおかげで、氷のように固まっていた私の不安は少し溶けたような気がします。それから、私は勇気を出して後の子やクラスの子に話かけました。その時、話かけたから、今の自分があると私は思います。「友達になりたい」と心から思っていたので、勇気が出たんだと思います。今では、一生懸命に願って行動すると本当に希望はかなうんだと感じています。

夢や目標に向かってがんばろうと思う時、私は、いつも、赤ちゃんの時(二才十ヶ月)の録音テープを聴いています。そこには、お母さんとおしゃべりしながら、歌をうたっている小さな自分がいます。それはなつかしくて、おもしろくて、笑えてしまいます。当時流行していた「フラワー」という曲です。

ぼくらは 愛の花咲かそうよ
苦しいことばかりじゃないから
こんなにがんばっている君がいる
かなわない夢はないんだ

そんな、歌詞でした。当時、二才の私が、十年後の私をはげましてくれている様で不思議と元気が出てきます。勇気もわいてきます。

このように、自分らしさ、私らしさについて考えてきましたが、どんな時も私は、一人ではなかったということを感じて、とても、うれしく思います。思い出を振り返る時、家族や友達や周りの人々の温かい心に支えてもらいながら、成長させてもらったことに感謝の気持ちです。これからも「日進月歩」の心で私らしさを生かしてがんばりたいです。困難な事でも、無理だと決めないで、目標を作ってあきらめずに、少しずつ、努力しようと思います。



「日々の糧を読んで」

相愛中学校 二年 築地 詩音

私は、毎日学校で、「日々の糧」という書物を、朝と夕に分けて読んでいます。

日々の糧の言葉は、一日から三十一日まで朝と夕、すべて違って、読むたびに、その言葉に喜びを感じたり、はげまされたり、勇気や希望、元気をもらったり、同感したり、考えさせられたりしています。

そのたくさんの言葉は、すべて親鸞さまのおっしゃったことを書かれていると、私は中学一年の時、学校の宗教の時間に初めて知り、驚くと同時に、親鸞さまを尊敬しました。

私は、入学時、「日々の糧」を配られ、「これ何?」、「これ、毎朝毎夕読むん!？」と思っていました。

しかし、読んでいくと、私の心に光がさし込み、キラキラと輝いていたのです。

私は、最初に思っていた言葉がすぐに消え、「宗教ってすばらしい。」と思うようになりました。

宗教の成績は悪いけれど、私は満足していました。

私を、中学一年の時からずっと支えてくれている「日々の糧」には、感謝の気持ちで、いっぱいです。

その「日々の糧」の中で私が一番気に入っている言葉を紹介します。

「日々の糧」 六日 朝

夏になると 冬がよいといい

冬になると 夏がよいという

狭い家に住めば 広い家に住む人が羨ましいといい

広い家に住めば こじんまりとした狭い家がよいという

独身の頃には 早く結婚したいといい

結婚すると やはり独身時代が気楽だったという

それじゃ どこにも幸福はあるまい

これを読んで、一番に思ったことは、「確かに。」ということです。

私にも、こういう経験がたくさんあります。

夏の日に、「ああ～、もう暑い!早く冬になってほしいわ～」と言い、冬の日には、「さむ～。何でこんなに寒いん?早く夏になれへんかなあ～」と。

確かに、人間というのは、わがままな生き物です。

しかし、そんなわがままばかりではいけないということ、この言葉で学び、自分の考えは間違いだったと気付きました。

前までの私は、「わがままを言わなかったら、何もできない。」と、思っていました。

しかし、今の私は「わがままばかり言っていたら、いつまでたっても幸せになんかなれない。」と思うようになりました。

私は、“ネガティブな私”を、“ポジティブな私”に変えようと思いました。

今までのことは、全て水に流して忘れて、新しい気持ちで前に進もうと思いました。

親鸞さまは、私の背中を押してくださったような気がします。

私は、自分で決心したことを忘れずに、実行していきたいと思います。

「形のちがう食べ物」

相愛中学校 三年 中西 真菜

ここ最近、形の変った野菜や、カステラやケーキなどの端が、インターネットの中で人気になっています。昔なら、良い形でなければ味は同じなのに捨てている所がたくさんありました。私の祖父も、農家で、米や野菜を作っているけれど、形の良くない物や、日光に当たりすぎて色に変色している物なんかは自分の家の食卓に並んでいました。私は、いつも母が買ってくるトマトなんかよりも、形がいびつだったり、小さかったりするトマトのほうがずっとおいしいなと思います。私が長期の休みなどで祖父たちの家に行くと、毎回決まって、「おばあちゃんたちが作る野菜は農薬や使こうてないからおいしいやろ。」と言います。そして、農薬や化学肥料を使うと土が悪くなることを教えてください。私は本当にその通りだなあとと思います。見た目や害虫ばかりを気にして、薬をたくさん使った食べ物よりも、薬を使わず、多少の違いがあるぐらいの食べ物の方が安心して食べれると思います。

私は、今年の夏休みにも、祖父たちの所へ行きました。今年は、日光の強い日が続いたと思えば、「雨台風」と呼ばれた台風で、土が流れたり、せっかく穂をつけてきた稲がたおされたりしました。私や祖父たちは、今年はダメかもしれないと思っていました。でも、雨がやんで、久々に太陽の光が畑や田んぼを照らした日、祖母が畑から私の大好きなトマトを取って来てくれました。そのトマトは、形が普通のよりも小さかったけど、私には今まで食べたどのトマトよりも甘く感じました。あんなにひどい雨や風だったのに、このトマトたちは必死に生き抜いたんだなあとと思うと、生命の重さが伝わってきました。その中で、1つだけ、他のトマトの一部にくっついているトマトがありました。さくらんぼや、アメリカンチェリーがくっついているのは見たことがあったけど、トマトはなかったの、とてもびっくりしました。なんだか双子みたいだなあとそのトマトを見て思っていました。そう考えると、野菜などは、人間のような所があるんだなあと思いました。人の顔がみな同じでないように食べ物は所々違う所があるんだと思います。

日本は、たくさんの食べ物を輸入し、見た目ばかりを気にしていました。スーパーなどに行くと、主婦は形の良い物を選んで買ったりしています。でも、私は、見ためよりも、食べられることの方が大切だと思います。外国では、十分な食べ物がなかったりして、飢えている子供がいることを忘れてはいけないと思いました。日本も、戦時中は食べ物がなかった事、そして、これからの日本で、食料不足になる可能性があるかもしれない事は私たちが生きるうえで、考えなければいけません。食べる物を選ぶのは、とても幸せな事で、食べれる事は、感謝する事だと思います。

